

<研究ノート>

世界の上級日本語話者はどのようにその学習を継続させてきたのか
—2020 年 COVID-19 の影響も含めたインタビュー調査に基づいて—

How Advanced Japanese Speakers around the World Have Continued with Their Studying: Based on an Interview Survey Including Questions Related to 2020 COVID-19

鈴木 智美

東京外国語大学国際日本学研究院

SUZUKI Tomomi

Institute of Japan Studies, Tokyo University of Foreign Studies

1. 本稿の目的
2. 研究の背景
3. インタビュー調査の概要
4. インタビュー結果
 - 4.1. 日本語学習の道のりの多様性：日本語学習のきっかけ
 - 4.2. 日本語学習の道のりの多様性：次のステップへのきっかけ
 - 4.3. COVID-19 の影響
5. まとめと今後の課題

キーワード：自己学習設計、学習開始の背景ときっかけ、学習継続とステップアップのポイント、オンライン授業

Keywords: Personal/self-learning design, Cause and background in starting out, Hints for continuation and improvement, Online classes



本稿の著作権は著者が所持し、クリエイティブ・コモンズ表示4.0国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

要旨

本稿の目的は、世界の上級日本語話者がどのように日本語の学習を続けてきたのか、その過程の多様性をとらえ、学習を前に進めることのできた背景にどのような要因があったのかを探ることである。2020年夏現在のCOVID-19の影響も確認した。インターネットを介した通信システムにより、25名の協力者に総計約26時間半のインタビューを行った。上級話者の中にも、学習開始のきっかけが消極的な選択であった者もあり、子ども時代に学習を始める場合には、親のサポートが働いている場合が多いことがわかった。学習を継続し、上達へと導くものとしては、自身の学習方法の把握、学習方法の工夫、感動、好奇心、ライバル意識、将来への準備、費やしてきた努力と時間、昇進、リカレント教育、アカデミックな環境、流れに沿った自然体の態度などが鍵となる概念として抽出された。COVID-19による影響としては、コミュニケーション機会の減少、オンライン授業の難しさ、見通しの立たない状況の苦しさなどが挙げられた。この調査で得られたことを、将来的に教師の教育リテラシーの向上につなげていきたいと考える。

Abstract

The purpose of this paper is to understand how advanced Japanese speakers around the world have continued to study Japanese, and what various factors are behind their progress. The impact of 2020 COVID-19 was also investigated.

A total of about twenty-six and a half hours of interviews were conducted with 25 participants using a communication system via the Internet. It showed that some speakers started learning passively, and that parental support played an important role when starting out as a child. Key incentives for the continuation and improvement of studying were the following: awareness of one's learning style, try changing methods, pure inspiration and excitement, curiosity, rivalry, future preparation, amount of effort and time spent, career consciousness, recurrent education, academic environment, and flexibility in career decision.

The impact of COVID-19 included reduced communication opportunities, difficulty in online lessons, and the uncertainty of the future.

The results of this survey should be used in the future to improve teachers' educational literacy.

1. 本稿の目的

本稿の目的は、世界の日本語上級話者が、これまでにどのように日本語の学習を重ね、現在のレベルまで到達したのか、そのいわば「日本語と歩んできた道のり」を自身で振り返り、語ってもらうことを通じて、その過程の多様性をとらえ、同時に、その過程において学習を前に進めることのできたきっかけとして、どのようなものがあったのかを探ることである。2020年夏現在の状況下において、COVID-19が自身の活動に影響を与えているか、活動や学習の意欲を維持することができているか否かについても確認する。

2. 研究の背景

本稿の執筆者は、平成 29 (2017) ~平成 31 (2019) 年度に科学研究費補助金の助成を受け¹⁾、高度な ICT 化が急速に進む現代において、世界の日本語学習者がどのような学習ツールを使っているのか、その実態をオンラインアンケート調査により明らかにした。また、その結果について、複数回の研究会やワークショップを通じて、日本語教育に携わる主として現場の教師たちと共有をほかり、教育リテラシーの向上を目指して、今後の教育への取り組み方について議論した。アンケート結果から見てきたのは、世界の日本語学習者が種々のアプリやウェブサイトを、日常的かつ積極的に学習に活用している姿である。学習者からは、よく使用するツールとして計 124 種のアプリ、98 種のウェブサイトが具体的に挙げられた [鈴木他 2018,2019a,2019b,2020]。

さらに、上記研究では、一人の学習者がその学習の過程を通じて、これまでにどのような学習ツールを使ってきたか、学習の段階とツール使用の選択や変遷について、インタビューを行うことで探り出す試みも行っている [鈴木他 2019a, 中村他 2020]。その結果、学習者は、段階に応じた様々なリソースを取捨選択しつつ学習を進めていることが見てきた。この場合の「リソース」とは、学習アプリや辞書アプリなど、いわゆる物的なツールだけを意味するのではなく、より広い意味で学習に資するものとして、インターネットスクールの活用や、留学、友人からのアドバイスを参考としたこと、教師との相談を行うことなども含まれる。自身の学習を自身でデザインしつつ学習を進めていくことは、初級レベルの段階から見られた。

上記インタビュー調査は、「学習ツール」の活用に焦点を当てて行ったものだが、学習者が、学習ツールの使用も含め、自らの学習を自身でモニターしつつ、様々な取捨選択を行いながらその歩みを進めていることがわかり、学習を継続させる力、即ち、結果的に学習を上級レベルへと到達させる力は、その「自己学習設計」(personal/self-learning design) の力と結びついているのではないかということが見てきた。具体的に、1 人の上級学習者は、ワークショップ形式で行われたインタビューの中で、参加者からの「学習の継続を支えたものは何だったのか」という質問に対し、「上達を感じられること」が大切ではないかと回答している [鈴木他 2019a]。自己学習設計を支えることの 1 つに、「学習レベルが上がっていくこと」、そしてその上達を実感できるということがあり、それが学習の継続の意欲へとつながっているのではないかということが考えられる発言である。学習がうまくいけば、力がつき、学習レベルが上がる。そして、その上達を実感することができれば、それが再び継続への意欲を与える。この繰り返しが上級話者への道としてあるならば、やはり、自身で自身の学習を

的確にデザインしつつ進めていく力を持つことは、学習の継続と上達にとってなくてはならないものではないかと考えられる。

そこで、本稿では、現在何らかの形で日本語を用いた活動を行っている上級レベルの話者に協力を仰ぎ、インタビューを通じてそれぞれの日本語との関わりを振り返ってもらうことで、これまでどのように学習を「継続」させてきたのか、即ち、どのように学習を「次のステップ」へと移行することができてきたのかについて探ることを試みる。学習を継続させるポイントとして、学習が何らかの意味で次の段階へと進むところに着目し、そのようなきっかけが学習の過程の中でどのようにして得られるのか、学習者自身の意識や学習への姿勢等について触れられた発言に注意を払いつつ、そのありようを探りたい。

現在、世界では、日本語教育を実施している機関において、約 380 万人の学習者が日本語を学んでいると言われる [国際交流基金 2020]。日本国内で日本語を学ぶ留学生は約 31 万人とされ [日本学生支援機構 2020]、そのほかにも、機関等に通うことなく自学自習で日本語学習を続けている学習者もいる。それらのすべての学習者を見れば、その日本語を学び始めた動機、背景、そして現在学んでいるレベルも様々であろう。本稿では、様々な学習者の様々な学びのありようを確認することを目的とし、この段階では、これを何らかの理論面での貢献等にすぐに結びつけることまでは意図していない。得られたインタビューデータから早急に結論を導くことはせず、様々な上級話者の学習の道のりの振り返りを、まずはそのままにまとめておきたい。協力者の出身地域や学んだ機関など、その属性により回答を限定・分類することもしないこととする。

3. インタビュー調査の概要

ここでは、機縁法に基づき、計 25 名の上級話者からインタビュー調査への協力を得ることができた。協力者を募る際には、現在日本語を使った何らかの活動 (勉学、仕事等) を行っている上級レベルの話者で、これまでの自身の日本語学習の道のりについて 1 時間程度のインタビューで話してもらえる人ということとした。大学や大学院などで勉学中である場合も含め、企業等に就職しているか、フリーランスとして活動しているか等についても問わないこととした。

インタビューは、2020 年 8 月 (一部 9 月) に、インターネットを介した通信システム (Zoom、一部 Skype) を用いて行われた。なるべくくつろいだ雰囲気、自分と日本語との出会い、そしてこれまでの学習および活動の道のりについて語ってもらえるように配慮した。学習を始めたきっかけから、現在に至るまでについて、半構造化インタビューの形で順に振り返ってもらった。最後に、2020 年現在の特殊事情として、COVID-19 は自身の活動にどのような影響を及ぼしているかについてもそれぞれ確認した。事前にインタビューについての説明書を送付し、同意書を得た。使用言語はすべて日本語である。インタビュー時間は平均して約 1 時間で、後から確認ができるよう、同意の上、録音を行った。インタビュー時間は、総計約 26 時間半となった。

表1 これまでの日本語学習の道のりについてのインタビュー協力者(実施順)

実施日	出身地域 ²⁾	現在の所属等	時間
8月3日	東アジア	大学院生(日本の大学院)	1時間20分
8月3日	南アジア	大学生(母国の大学)	1時間30分
8月4日	中東・アフリカ	大学生(母国の大学、日本留学中)	40分
8月4日	東ヨーロッパ	大学生(母国の大学)	1時間10分
8月5日	東ヨーロッパ	大学生(母国の大学、日本留学中)	50分
8月6日	東アジア	大学院生(日本の大学院)	1時間
8月6日	東ヨーロッパ	大学生(母国の大学、日本留学中)	1時間30分
8月6日	中南米	社会人(日本で就業中)	40分
8月6日	中南米	社会人(日本で就業中)	1時間
8月7日	東アジア	大学院生(日本の大学院)	1時間15分
8月7日	東アジア	大学院研究生(日本の大学院)	1時間10分
8月7日	中東・アフリカ	大学院研究生(日本の大学院)	1時間
8月7日	北米	社会人(母国で就業中)	55分
8月10日	東南アジア	大学院生(日本の大学院)	50分
8月10日	東南アジア	大学院生(日本の大学院)	55分
8月10日	中東・アフリカ	大学院生(日本、母国以外)	50分
8月11日	東南アジア	大学生(母国の大学)	50分
8月15日	中東・アフリカ	大学生(母国の大学、日本留学中)	1時間15分
8月15日	北米	社会人(日本で就業中)	1時間
8月15日	東南アジア	大学院研究生(日本の大学院)	45分
8月16日	東南アジア	社会人(母国で就業中)	1時間30分
8月19日	中南米	社会人(日本で就業中)	50分
8月22日	東アジア	大学院生(日本の大学院)	1時間10分
8月26日	中東・アフリカ	大学生(母国の大学、日本留学中)	50分
9月16日	中央アジア	社会人(母国で就業中)	1時間40分

表1を、各協力者の出身地域および現在の所属等でまとめ直すと、下記の表2、表3の通りとなる。

表2 インタビュー協力者(出身地域別)

出身地域	人数
東アジア	5
東南アジア	5
南アジア	1
中央アジア	1
中東・アフリカ	5
東ヨーロッパ	3
北米	2
中南米	3

表3 インタビュー協力者（現在の所属等別）

現在の所属等	人数
大学生（母国の大学）	3
大学生（母国の大学、日本留学中）	5
大学院研究生（日本の大学院）	3
大学院生（日本の大学院）	6
大学院生（日本、母国以外）	1
社会人（母国で就業中）	3
社会人（日本で就業中）	4

4. インタビュー結果

本稿では、すべてのインタビュー内容を網羅的に報告することはできないが、協力者のそれぞれの日本語学習の多様な道のりのありようを、その多様性のままにできるだけとらえていくことを試みる。4.1 では、日本語学習のきっかけについて得られた回答をまとめ、4.2 では、インタビューを通じて、それぞれの協力者が自身のこれまでの道のりを振り返る中で、日本語の学習あるいは活動を次のステップへと進めるきっかけや動機、自身の取り組み方などへの言及がなされた箇所について、的を絞って取り上げることにする。最後に、2020年現在のCOVID-19の影響についてのコメントをまとめる。

4.1. 日本語学習の道のりの多様性：日本語学習のきっかけ

協力者25名は、その出身地域も様々であるため、日本語学習のきっかけにも種々のものが見られた。以下に、その事情をいくつかにまとめながら挙げる。

<文化的な側面や、母国とのつながり、将来性から>

- ・欧米とは異なる文化圏に留学してみたいと考え、日本への留学プログラムに応募した。留学が決まってから、日本語の学習を始めた。
- ・母国と日本とで文化的に似ている点があり、母国との時差（物理的な距離）もあまり大きくないことから、日本語を選んだ。
- ・学習する外国語の選択肢として日本語のほかにもう1つの言語があったが、その言語が使用されている国と母国との関係があまり良好でないことから、選択しなかった。
- ・高校で外国語科目を選択する際に、将来性（留学、仕事など）を考えて日本語を選んだ。もう1つの言語が選択肢としてあったが、その言語が使用されている国と母国とは、以前と比べるとそのつながりが近くなっているため、選ばなかった。

<日本への良好なイメージ、日本文化への興味、日本語に触れてきたこと>

- ・日本のアニメ、漫画、ドラマ、映画などに興味があり、よく見ていた。好きだった。（日本のアニメとは知らずに見ていた、なども含めて複数の回答あり）
- ・日本のゲームに熱中していた。ゲームのミッションをクリアするために、日本語で書かれたゲームのガイドブックを理解したくて、まず文字の勉強から始めた。

- ・母国では、日本はいいイメージがあり、日本に興味があった。
- ・黒澤明監督の日本映画のファンだった。安部公房の小説を母国語で読み、日本語で読みたいと思っていた。

<英語以外のもう 1 つの学習言語としての選択>

- ・英語は皆ができる、普通のことなので、さらに続けて英語を勉強するのではなく、違う言語を勉強しようと思った。
- ・それまで勉強してきた英語があまり好きではなかったので、違う言語を勉強しようと思った。
- ・英語のほかにもう 1 つの言語を習得していると「かっこいい」と考えたため、新しい言語として日本語を選択した。

<母国の多言語・多文化環境>

- ・母国はもともと多言語・多文化の国であり、母国の人々にとって 3 つの言語を習得していることは普通のことである。自分もさらにもう 1 つの外国語を既に勉強しており、言語を学ぶことは自然なことで、興味もあった。

<親の影響・親からのすすめ・親のサポート>

- ・親がかつて日本で働いていたことがあり、幼い頃から写真を通じて日本文化に触れていた。親も大学で日本語学科を選ぶことを勧めてくれた。
- ・母国では、成績が良い場合、親は子どもに科学分野（理科系）に進むことを勧めるが、自分は言語が得意であったため、親が言語を学ぶことを後押ししてくれた。
- ・小学生の時、日本のアニメに興味を持っている自分を見て、親が、英語と日本語を習わせてくれた。
- ・子どもの頃から語学に興味を持っていた自分に、中学生の頃、親が日本語を学習できる機関を探してくれた。日本の在外公館は遠方であったためその開講コースを受けることは難しく、上級まで教材のそろっている自宅近くの日本の学習塾に決めた。その学習塾からは、日本に留学した後も教材を送ってもらい、学習を継続し、コースを修了した。親の職業が教師であったため、よく考えて学習機関を選んでくれた。
- ・親が海外とつながりのある仕事をしており、その影響から、子どもの頃から外国に興味があった。大学では国際関係論を専攻し、言語は日本語を選択した。
- ・親の仕事の都合で子ども時代を日本で過ごした。自分も、一度習得した日本語を忘れたくない、維持したいと考えていた。

<親の考え方との違いを超えて自分で決める>

- ・母国では、理科系のほうが就職に有利であり、親は自分に理科系に進んでほしいという希望があった。しかし、高校における進路コース選択の際、成績が少し足りなかった。自分の人生を決めるのは自分だという気持ちを強く持っていたので、親の考えとは異なっても、進路は自分で決めることにした。高校で選択外国語として日本語を勉強したことから、大学では日本語学科に進むことに決めた。

<日本語を選択することはチャレンジ>

- ・大学で言語科目を選ばなければならなかった時、英語以外に何かチャレンジのしがいのある難しい言語を選ぼうと思った。選択肢の中で一番難しい言語は日本語であるという、学科の教員のコメントに引かれた。
- ・漢字など、母語と異なる文字体系が興味深いと思った。

<大学における日本語学科のレベルの高さから>

- ・母国で入学を希望する大学では、最もレベルの高い学科が日本語学科だった。ただ、母国では医者やエンジニアがいい職業と考えられており、周囲からは、言語、しかも日本語を専攻するなど少し変わっていると思われたこともある。

<学びやすさ：言語の選択は無理なく、学ぶ機関は最も良いところを>

- ・大学で言語・文化を専攻することにした際、いくつかの言語の中から、発音的に問題がなさそう、文法的に母語とも共通点のある日本語を選んだ。在籍する教授の数、日本人の教師の有無などから、学ぶのに最も良いと思われる大学を選んだ。

<消極的理由から日本語学科に>

- ・自分で日本語専攻を選んだのではなく、入学を希望する大学で、自分の成績で入学可能なのが日本語専攻だった。

<留学するための奨学金プログラムが整っている>

- ・奨学金を得て勉強できるプログラムがあることから、日本への留学を選んだ。

<自分の専門分野のレベルが高い>

- ・日本では、自分の専門分野のレベルが高いため、留学のための奨学金プログラムに申し込んだ。

日本のアニメ等に親しんでいたことは、やはり学習の背景としてよく言及された。また、積極的に日本語を選択したという回答も多いが、上級話者の中にも、その時の状況から消極的に日本語を選択することとなったという場合があることがわかった。小学校高学年～中学生ぐらいの年齢においては、外国の言語や文化に興味を持った際、親がそれを学習へとうまくつなげたことを示す回答が複数見られ、家庭における教育環境、家族のサポートが、日本語学習の開始時期において、その将来の選択に影響を与えていることが見てとれる。

4.2. 日本語学習の道のりの多様性：次のステップへのきっかけ

日本語の学習および活動を進めていく中で、その継続、および次の何らかのステップへの移行などはどのようになされるのか、協力者自身の考え方や取り組み方を含め、広い意味でそれに関係すると思われるコメントが得られたものには、次のようなものがあった。

<自分の学習方法への気づき、日本語力の伸びへの気づき>

- ・日本に留学して勉強に対する態度が変わった。母国の大学ではトップクラスの成績だったため、先生やクラスメートたちからの期待が高く、間違えることはできない、というプレッシャーになっていた。日本に留学して、ほかの留学生も結構間違っていることに気づいた。間違えるのは普通のことであり、恥ずかしくないと思うようになった。
- ・高校生の時から一生懸命日本語を勉強していたが、話す自信がなかった。間違えることが怖くて話せなかった。大学で日本に留学して、たくさんの留学生と出会ったが、間違えてもどんどん話しているのを見て、怖がらなくてもいいのだと思った。
- ・日本に留学し、どの留学生も日本語で話しているのを見て、自分も日本語で話す自信を持つようになった。日本に来る前の一番の弱点は、話すことに自信がなかったこと。来る前だったら、1時間もインタビューで話すことなどは自信がなくてできなかった。
- ・大学在学中に1年間留学し、会話力が伸びた。日常会話が自然にできるようになった。
- ・母国の大学の日本語サークルの日本人留学生と仲良くなり、サークル以外でもよく話すようになり、日本語で話す自信が持てるようになった。
- ・教科書で文法などを勉強し、上手になってから日本のアニメ、小説などを見たり読んだりするのが普通だと思われるかもしれないが、自分の場合は逆であったのがよかったのではないかと思う。子どもの時にたくさんの日本のアニメを(母語の字幕付き、音声は日本語で)見ていたことから、既にたくさん日本語のインプットを受けていた。
- ・専門分野の文献を読むのに漢字の力は大事なので、1日1時間でもいいので漢字の勉強を続けている。漢字も文章の中で見ると使い方がわかる。
- ・言語を勉強するのは一直線状のものではない。木の枝のような感じ。枝を育てないといけない。小さい枝があって、葉っぱもあって、それが木の基礎を守る。
- ・小学生の頃を他国で過ごし、その後、母国に戻って高校生まで過ごした。母国の生活に慣れておらず、あまり友人もできなかった。アニメなどをきっかけに日本語に興味を持ち、小学校から高校までの間、暇な時間はいつも自分でインターネットやアニメを使って日本語を勉強していた。これがいわば自分の「趣味」みたいになった。

<学び方を変える、学び方を工夫する>

- ・中学生ぐらいの時、自分でひらがな・カタカナを勉強してみたが、とても時間がかかり、一時あきらめた。その後、家庭教師のウェブサイトを見て、日本人の先生にプライベートレッスンを受けることにした。言語教育が専門の先生ではなかったが、やさしい方で、とても楽しかった。高校生になってからは、外国語のコースを開講している町の言語センターで勉強し始めた。母国人の先生だったが、ゲームを取り入れたり、会話練習をしたり、教え方がとてもよかった。
- ・受験勉強が大変だったので、母国の大学の日本語学科入学直後は少し勉強は休んだ。大学2年生になって積極的に勉強方法を探し始め、アプリなども友達から聞いて使うようになった。YouTubeなどで、日本語の勉強方法などをいろいろ探した。学期中は授業の課題をやり、夏休みに入ったら JLPT (日本語能力試験) の勉強をやるなど、自分の勉強のペースができてきた。いつも、どうやって勉強法を改善しようかと考えている。

- ・奨学金プログラムで来日してから、日本語を学び始めた。子供向けの科学の本が、言葉の勉強のためにはとてもよかった。大人が既に知識として持っている基本的なことをわかりやすく説明している。大学の中級・上級の日本語クラスの授業は、あまり興味が持てなかった。読む内容(教材の内容)が、外国人と日本人の関係や、日本人の考え方など、ステレオタイプなことばかりだったので。
- ・アニメの日本語は普通の日本語の会話とは違うので、注意が必要だと思う。ドラマのほうが、日本の社会の様子を知ることのできるのも、勉強のためにいい素材だと思う。
- ・アニメや様々な動画は、普段使われるいろいろな日本語表現を聞くことができ、言葉の使い方が学べるが、見る時間がなかなかとれないので、「ながら」勉強をすることにした。料理や洗濯をする時に、バックグラウンドでそれらを流している。
- ・自分で YouTube チャンネルを開き、母語で字幕を付け、日本のことを日本語で紹介する動画を配信することにした。学んだ難しい表現も積極的に織り交ぜて使っている。
- ・日本に留学してから、友達と日本語で話している。英語で話す留学生も多いが、英語は自信がないから日本語で話そうと言ってくれた留学生の友人がいたので、よかった。
- ・ちゃんと日本語を使っている日本人を見たら、その日本語を真似してみようとしている。

<感動>

- ・子どもの頃に日本のアニメを大量に見ていたもので、知らず知らずのうちにインプットされた表現がたくさんあったと思う。大学の日本語専攻で日本語を勉強し始めた時、知っている表現にたくさん出会って、驚いた。聞いたことのある言葉、なつかしい言葉が出てくると、「ああ、これだ」と興奮した。
- ・大学卒業後、仕事に就いていたが、専門分野についてももう少し高度に学びたいと思った。違う文化も経験したいので、留学することにした。日本の奨学金プログラムに合格し、すごくわくわくした。来日前、YouTube で簡単な日本語、必要な言葉、よく使う表現などを予習した。来日した4月はすごくいい思い出。
- ・日本語をずっと独学で勉強していたが、高校生の時、初めて学校に日本人の先生が教えに来た。その時、すごくモチベーションが上がった。
- ・母国の大学で初めて日本語の授業を受けた時、直接法で「こんにちは」から会話が進んでいき、その日日本語がまったく初めてだったにもかかわらずコミュニケーションができて、とても印象的だった。

<ライバル意識、強い気持ち、好奇心>

- ・自分の他にも日本語が話せる留学生がいると、自分より上手かなと気になる。負けたくないというライバル意識もあって、自分も頑張る。
- ・学生時代から自分だけが日本語がすごくよくできたということではない。クラスメートは皆、心の中では「自分ができる」という自負があり、仲はいいが、ライバル意識も強かった。当時のクラスメートの中で今日本語を仕事に結びつけている人が、自分のほかにもいる。
- ・母国の大学で日本語を選択した時、家族には、日本語のような難しい言語を選んでも、身につけるのは難しいと言われた。なおさら頑張って、留学できるぐらいに上達しようと思った。

- ・自分のよかったところは、好奇心が人の倍ぐらい強かった点ではないかと思う。習った日本語を、なんとかして実際に使ってみたいと、母国の町中で日本人の観光客を見ると、話しかけたりしていた。

<奨学金、目標>

- ・奨学金プログラムに合格し、来日してから日本語を学び始めた。大学院の入学試験を日本語で受けること、修士論文を日本語で書くこと、いずれも大変だったが、だめだったら国に帰らなければならないので、頑張った。
- ・奨学金プログラムに合格し、試験結果が良くなければ奨学金停止になるため、よく勉強した。
- ・母国で入学した大学は日本のいくつかの大学と協定を結んでおり、奨学金をもらって留学しようというはっきりした目標ができて、一生懸命勉強した。

<大学院課程の準備をする、将来を考えて準備する>

- ・大学 4 年生の時に日本の大学院に入ろうと決め、日本の大学の先生に連絡をとって薦められた本で勉強を始めた。
- ・日本のいくつかの大学に研究生として応募したが、すぐに受け入れの返答をくれた教授の研究室に留学することに決めた。
- ・奨学金プログラムによって既に日本の大学で学んでいたため、必要だということではなかったが、大学在学中に日本語能力試験を受験した。自分が高いレベルの日本語力を身につけていることが確認できれば安心すること、そして卒業後に日本で就職する場合、日本語力の証明として持っていることも必要と考えた。
- ・現在、日本で就業中だが、将来的に日本国籍を取得したいという希望を持っており、引き続き日本語力を高めて、できれば日本語能力試験 N1 (上級) レベルに到達したい。時間があれば、日本語を学べる学校やコースをさらに受講したい。
- ・母国の大学の日本語専攻は、自分で積極的に選んだわけではなかったが、卒業後は日本の大学院に進学しようと考え、計画的に準備した。2 年生が終わったところで日本語能力試験 N1 (上級) レベルをとると決め、勉強した。計画通り合格した。3 年生では英語の勉強に力を入れ、4 年生では、ボランティア活動なども積極的に行った。日本留学をサポートする塾があるので、研究計画などのアドバイスを受け、準備した。

<専攻分野を柔軟に変えていく>

- ・親は自分に理科系に進学することを希望していた。母国では、理科系には経済・経営学分野が含まれる。日本では経済・経営学分野は文科系である。したがって、日本に留学して(母国では理科系の) 経済・経営を学ぶなら、ということで、文科系選択について親からの同意を得た。勉強・準備をして、日本の大学(経済系の学部)に進学した。しかし、履修した授業の1つから興味を持って、卒業論文は結局、分野の異なる言語学関連のテーマで書くことになった。卒業後、他大学の大学院に進学したが、入学してから半年間、自分のやりたいことをもう一度よく考え、今は、言語を通して「社会」を見るという方向に興味が変わってきている。

<学ぶ目的が変わる>

- ・母国の大学生時代、日本のゲームに熱中しており、ゲームの攻略本を日本語で読めるようになればと、独学で文字の勉強を始めた。日本語既習者の知り合いに、文法を学ぶと文章が読めるようになるとアドバイスを受け、日本語の初級教科書で自分で勉強し始めた。1年間勉強を続けているうちに、自分の専門分野（法律・経理関係）においては、皆、英語はできるが、日本語ができる人はほとんどいないことに気づいた。日本語ができると、将来仕事に有利かもしれないと、大学後半には学ぶ目的が変わってきた。

<自然体、自然の流れで次へ進む>

- ・準備をしてきた通り、母国の大学を卒業後、日本の大学院で学んでいるが、これも人生の中の旅行のような感じ。新しい発見もあるが、必ずしもずっとここに定着するというわけでもないと思う。
- ・日本の大学を卒業後、日本で就職した。特に業界などにこだわりはなく、国際的に何かを行っている会社で、かつ「普通」のいい会社を選んだ。新規採用の応募エントリーシートに「あなたは世界をどのように変えたいか」など、大げさな質問が設定してある会社には興味が持てなかった。入社後は、(日本語力が問題なく高いので)日本語研修は不要と判定され、そのまま現場で仕事にあたっている。仕事に必要な表現などは周りの人を見て覚えるので問題ない。

<就業経験を経てから留学へ>

- ・母国の大学を卒業後、日本企業の海外拠点に就職したが、現地採用者はなかなか上のポジションに昇進できないことがわかった。大学で日本語を勉強してきたが、本当の日本をまだ見ていないということから、日本に留学したいと考えるようになった。若いだから、もっと外に出ていくべきではないかと考えた。給料は悪くなかったが、会社はやめて、日本の大学院を目指すことにした。
- ・大学で日本語を専攻したが、在学中は金銭的なこともあって留学はあきらめた。卒業後、母国で日本語の教師をし、通訳のアルバイトもしていた。日本に行ったことのない自分の日本語はどうなのかなと思うようになり、一度日本で勉強したいと思うようになった。(現在、日本の大学院の研究生で) 大学院を終えたら帰国し、もっといい大学で仕事がしたいと考えている。就職に年齢制限があるのが少し心配だが、留学経験者のほうが有利だと言われている。

<よい仕事を得るために日本語のレベルを上げたい>

- ・現在、日本に留学中だが、帰国後、母国の大学を卒業したらもう一度日本へ来て学びたい。将来は日本と関係のある仕事がしたい。大使館などで働くためには日本語能力試験のN1(上級)かN2(中級修了)レベルが必要である。
- ・母国では大学卒業後、日本の機関の現地事務所で日本語教師の仕事に就いていた。大学在学中にその事務所でインターンシップを行ったのがきっかけである。本来、大学院修了レベルが採用条件であったため、日本の奨学金プログラムに応募し、大学院留学を目指すことにした。大学院修了資格がないと、今後、難しい仕事が担当できないと思うので。

- ・社内(日系企業の現地支社)で昇進するために、そして将来的には自身でより良いビジネスを行うために、もっと高度で自然な日本語を身につけたいと考えている。具体的には、まず日本語能力試験 N1(上級)レベルの合格を目指している。

<費やしてきた努力・時間を生かしたい>

- ・勉強を続けていく中で、日本語能力試験 N3(中級中盤)から N2(中級修了)レベルまでが苦しかった。この2つはレベルが全く異なる。合格するまで2年ぐらいかかり、あきらめかけたこともあった。周囲にもここであきらめた人がいる。しかし、ここであきらめたら、これまで勉強してきた時間をもったいないと考えることで、モチベーションを維持できた。
- ・日本の大学を卒業後、日本で就職した。たぶん、この先もずっと日本にいるのではないかと思う。これまで日本で投資してきた何年間もの努力、積み重ねてきたものが大きい。日本をやめるなら母国に帰るということになるが、今さら帰るとは思わない。

<アカデミックな雰囲気と環境、満足感>

- ・日本の大学を卒業後、引き続き他大学の大学院に進学した。大学院説明会がとてもよかったので、その大学院に進学することを決めた。教授と学生たちとの距離が近く、かつ学術的な雰囲気も備えていた。
- ・母国で入学した大学は日本語専攻の名門大学であり、先生方も良く、とても良い雰囲気だったので、勉強は楽しかった。自宅から大学まで遠かったため、通学は大変だったが、友だちもできて、遠くてつらいと思ったことはなかった。
- ・日本の大学院博士課程を修了し、母国に戻った。日本語教師・通訳の仕事をしている。母国でも研究は続けられるだろうと考えていたが、学術的な環境が整っておらず、その点で充実感が得られない。アカデミックな環境を渴望している。人と話す中でいろいろな影響を受け、視野を広げたい。次の機会をとらえて、日本へ再度行くつもり。

インタビュー協力者の語りの中からは、その学習を継続し、次のステップへとつなげていくことを可能にするものとして、上記で見てきたように、自身の学習方法の把握、学習方法の工夫、感動、好奇心、ライバル意識、将来への準備、費やしてきた努力と時間を無駄にしないこと、昇進とより良い仕事、リカレント教育、アカデミックな環境、自然な流れに沿って自然体で進むこと、などがその鍵になるものとして観察された。

4.3. COVID-19 の影響

最後に、2020年現在の COVID-19 の影響についてのコメントをまとめる。

<コミュニケーション機会の減少>

- ・アルバイト、ボランティア活動などが中止になっており、日本語でコミュニケーションする機会が減っている。(複数の回答あり)
- ・(外出自粛生活の中で) 会話の力が悪くなっている気がする。会話の力を高めたい。

- ・3 か月ぐらい日本語を使っていないと思う。文法が変になっている気がする。言葉をすぐに思い出せなかったりする。
- ・(前年秋から1年間の予定で) 日本に留学したが、後半はコロナの影響で誰とも会えなくなった。日本人の学生と交流するのがいい勉強になると思っていたが、今、話す機会はあまりない。
- ・4月から大学の活動がすべてキャンセルになり、交流する場であったゼミも、日本人学生と留学生との間で分かれてしまっているように感じる。
- ・大学では、決まった時間に、制限された人数しかキャンパスに入れない。研究室で日本人の友人にいろいろ聞くことができない。
- ・4月から日本の大学の研究生になったが、渡日できていない。指導教員のゼミもオンラインで行われ、ほかの皆はお互いに知り合いだが、自分だけが知らないので、心細かった。Zoom は日本語が聞き取りにくく、集中力を要する。

<試験の中止>

- ・JLPT(日本語能力試験)が中止になった。自分の予定では、今年受けたかった。
- ・母国の大学のコースでは期末試験がキャンセルになり、中間試験の点数だけで成績が決まった。自分の今のレベルを知るために、試験は必要だと思う。

<通学せずに済む、オンラインで授業が受けられる、オンラインでアルバイトができる>

- ・留学せずに、母国で日本の大学の日本語コースがオンラインで受けられることになった。渡航費がかからなくて済む。
- ・授業がオンラインになって、通学のための体力を消耗しない。通学で疲れないので、その分、自分の勉強ができる。
- ・外出自粛中、部屋で本を読んだり日本語能力試験準備の勉強をしている。不満はない。
- ・普通のアルバイトはできないが、オンラインで英会話を教えるアルバイトを始めた。

<教室授業でなくなったことからの不満>

- ・教室授業があった時は、毎日友だちと日本語を使っていたのに、Zoom 授業になると、つまらない。参加者はカメラをオフにしており、ブレイクアウトルームでしか話せない。
- ・オンライン授業になったと言っても、教え方はこれまでと同じ(同じ教え方がオンライン上に移行しただけ)なのに、なぜか課される課題が多くなった。
- ・Zoom の講義は理解しにくいと感じる。わからない部分を隣の人に聞いたり、雰囲気判断したりということができない。発言するのも難しい。皆、自分で自分のことをやっている感じで、知り合いになるのが難しい。学期中に5つの授業のうち3つを同じように受講している人がいたが、毎回画面に名前が出ているだけで、結局、その人がどんな人かもわからずに終わった。教室で授業を受けていたら、そんなことはない。新入生にはつらい状況である。
- ・オンラインでは、先生は画面の中にいるだけで、終わった後に質問したりすることができない。

<モチベーションの低下>

- ・長期間家にいることから、エネルギー、モチベーション、やる気、集中力が下がり、学力が低下したような気がする。

<就職の心配>

- ・大学院修了後の就職のこともどうなるかという心配がある。日本で就職したい。

<研究テーマの変更>

- ・自分が研究対象とする地域でフィールドワークを行うことは(今の状況では)無理。研究テーマを変えなければならない。

<生活費の問題と見通しの不安>

- ・研究生として渡日できていない。母国ではもとの職場は既に契約が終わっているため、渡日できるまでの間、生活費の問題から日系企業で新たに仕事を始めた。日本の大学の授業は、仕事と平行してオンラインで受講している。この後、日本に本当に行けるのか、これからどうするか、実は今よくわからない。

コミュニケーション機会減少の声はやはり複数聞かれた。オンライン授業については、教師と受講生、また受講生どうしのつながりを築くことが難しい点が指摘されている。短期間の留学を終えてこれから帰国する場合にはさほど深刻ではないかもしれないが、仕事をやめてこれから渡日する予定であった研究生にとっては、見通しの立たない状況には苦しさがにじみ出ている。

5. まとめと今後の課題

本稿では、日本語上級話者が、これまでにどのように日本語の学習を重ね、現在のレベルまで到達したのか、インタビュー調査を通じて、その過程の多様性をとらえ、学習を前へと進めるきっかけはどのように得ることができるのか、その学習への取り組み方なども含めて探ることを試みた。2020年の特殊な状況下において、COVID-19の与えている影響についても、確認した。

自身で自身の学習を計画し、進めて行く自己学習設計の力が、上達と継続のためのポイントであるとしても、そのすべてがただ学習者に委ねられているわけではなく、教師には、その設計を助ける役割がある。あるレベルの学習者に対して行うアドバイスも、現状における学習のあり方だけを見るのではなく、これまでの学習の継続や次のステップへの移行も視野に入れて、学習の流れ・過程の中に位置付けた上で行うことができるように、この調査で得られたことを、将来的に教師の教育リテラシーの向上の一助となるように今後考えていきたい。

注

- 1) 「日本語学習者の学習ツール使用状況の解明と教師の教育支援リテラシーを結ぶ総合的研究」(基盤研究(C) 課題番号:17K02842 研究代表者 鈴木智美)
- 2) インタビュー協力者の出身地域は、協力者個人が特定されないよう、外務省の示す「国・地域」の分類 (<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/index.html>) を参考に示している。なお、「アジア」地域は、「東アジア」「東南アジア」「南アジア」に分け、旧独立国家共同体(CIS) 地域の一部を「中央アジア」として示した。「欧州」のうち、今回の協力者の出身地域は「東ヨーロッパ」として示した。

参考文献

- 国際交流基金 2020『海外の日本語教育の現状 2018年度日本語教育機関調査より』
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey18.html>
- 中村彰・鈴木智美・渋谷博子 2020 「日本語学習者の学習ツール使用の変遷をその学習歴から探る一初級から超級までの6名の留学生へのインタビュー調査に基づいて一」『東京外国語大学 国際日本学研究』プレ創刊号、pp.186-196
- 日本学生支援機構 2020「2019(令和元)年度外国人留学生在籍状況調査結果」
<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/date/2019.html>
- 鈴木智美・清水由貴子・渋谷博子・中村彰・藤村知子 2018「予備教育課程の国費学部留学生の学習ツール使用状況—2016~2017年度実施のアンケート調査の結果から見えるスマートフォンアプリの使用目的の多様化と学習スタイルの変化—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第44号、pp.195-217
- 鈴木智美・中村彰・清水由貴子・渋谷博子 2019a 「ICT時代の日本語学習者はどのような学習ツールを使っているか—日本語教師を対象としたワークショップ実施報告—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第45号、pp.239-255
- 鈴木智美・清水由貴子・中村彰・渋谷博子 2019b 「東京外国語大学全学日本語プログラムで学ぶ留学生の学習ツール使用状況—2016~2017年度実施のアンケート調査の結果と分析—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第45号、pp.221-238
- 鈴木智美・清水由貴子・中村彰・渋谷博子 2020「海外の大学における日本語学習者のツール使用状況の解明—ICT時代における教師の教育設計リテラシーの向上を目指して—」東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究』10号、pp.23-48